

近代岐阜市における遊覧都市建設構想の事業展開

岐阜大学大学院 学生会員 ○XIAN YOUMIN
岐阜大学 正会員 出村 嘉史

1. はじめに

1920年代以降の日本では交通網の発達に伴い、観光は産業としても、都市施策としても重要な位置を占めるようになった¹⁾。1930年4月、鉄道省に国際観光局が設立され、日本の外国誘致事業が国策として展開されており、近代日本の全国各地で観光事業が実施されていた²⁾。

岐阜市は、1889(明治22)年に市制を施行した。市は金華山や長良川などの自然風光に恵まれており、従来名勝が重要視されていた。1923(大正12)年、市は都市計画を実施し、1929(昭和4)年からその目的について「遊覧都市七割、商工都市化三割の方針」³⁾とし、遊覧都市という構想を新たに掲げた。都市計画における戦略的背景の時期に、市は遊覧都市を目指し、岐阜市会や新聞記事などで常に取り上げられる話題となっていた。

当初岐阜市は工業による産業都市建設に向けて街路計画や郊外の街路整備の土地区画整理事業を進めていたが、後から都市全体に関わる構想が遊覧都市・衛生都市に変更されたことを、出村は指摘している⁴⁾。一方で、岐阜市は長良川ホテルや納涼台など、市営の観光事業を手掛けているおり、注目すべきトピックが多いにも関わらず、市の遊覧都市の構想による事業の内実に関するまとまった研究がまだない。

したがって本研究は、都市計画が導入された時期の岐阜市の動きに着目し、遊覧都市の構想の内容とそれに基づく事業を明らかにし、都市計画と関連する遊覧都市としての基盤整備との関係も含めて、実施された都市経営の実態を明らかにする。

2. 近代岐阜市観光事業の動向と都市計画

(1) 近代岐阜市の観光事業の動向

明治中期以降、岐阜市の繁栄が南へ移っていたことに伴い、北部の繁栄を取り戻すために、岐阜市北部の有志者らが計画や事業を展開した。高橋慶太郎らの有志者が1910(明治43)年に発起した「岐阜保勝会」は、長良川周辺の遊覧や岐阜公園の開発に力を注いだ⁵⁾。桑原善吉らの有志者が1923(大正12)年に発起した「北部市中有力者」は、北部



図-1 長良川の鵜飼
(※吉田初三郎絵鳥瞰図 昭和初期)

の発展策を計画するために、長良川本流付替問題・ケーブルカー架設計画を含めた鵜飼を中心とする金華山麓の遊覧開発計画・金華山麓の温泉運営などの事業を行った⁶⁾。このように都市計画の施行以前より、岐阜市の民間組織は遊覧開発を意識した都市基盤整備プロジェクトを手掛けていた。そのため、市が都市計画を実施する時期には、既に観光事業に対する実績は市井に蓄積されていた。

(2) 戦前岐阜市都市計画の概要

岐阜市は1923(大正12)年7月に旧都市計画法を適用した。戦前岐阜市の都市計画は、都市計画地方委員会を県に設置した後、都市計画区域を定め、都市計画街路網および市街地建築物法の地域を定め、公園、風致地区を指定していく手順を踏んだ。この一連の計画決定理由書を一貫対照することで、市が都市計画の推進過程において、遊覧面が強くなる傾向を読み取ることができる。

3. 近代岐阜市遊覧都市の事業展開

(1) 見せ鵜飼

1888(明治21)年に長良川の鵜飼が遊覧客に公開された。1924(大正13)年には、岐阜保勝会が、鵜飼遊船株式会社を買収して営業することになった。彼らは鵜飼観光を振興するために、観光客に向けて鵜飼観覧所としての「納涼台」を設置した。1927(昭和2)年から遊船事業と納涼台は市営事業となり、市は遊覧客本位の立場から鵜飼遊覧の改善計画を展開し始めた。1929(昭和4)年、「長良川鵜飼並同遊覧施設改善調査に関する臨時委員会」が8月の市会で設立された。鵜飼・納涼台の値下

げが実施され、鵜飼観覧の大衆化が始まった。その後、鵜飼施設の整備やサービスを充実し、鵜飼遊覧は観光客が殺到する夏の観光として盛況となった。

(2) 市営長良川ホテル

市は長良川添いの観光開発として、鵜飼遊覧客のためのホテル建設の必要を意識する。1929(昭和4)年9月16日の市会で遊覧施設改善調査委員会が開かれ、遊覧施設に全力を注ぐ方針を決めた。1930(昭和5)年5月、松尾市長はホテルの建設問題その他につき上京して、国際観光局の新井局長とその実施を検討している。1933(昭和8)年1月、市営長良川ホテルが開業した。鵜飼・納涼台の遊覧や市営ホテルなどの名声も世界に増えてきたと伴に、鵜飼・ホテルを中心とする英文パンフレットも発行された。(図-1)

(3) 金華山を中心とした改善計画

1927(昭和2)年、市の有力者らは登山遊覧者に交通機関の利便を図り、さらに金華山絶景・鵜飼遊覧などの岐阜名所を宣伝するために、廃案となっていた金華山ケーブルカー架設計画を再開した。しかし、風致被害や昭和2年の金融恐慌の影響で頓挫した⁸⁾。その後の1935(昭和10)年、再度計画が興る。『都市公論』には、この計画は金華山が都市計画風致地区に指定されることを契機としており県からの経費援助も期待されることが報じられている。しかし、時局の原因で実現しなかった。

鵜飼遊覧施設改善委員会も遊覧地としての金華山の魅力を引き出すために、金華山登山道路の改修や開設などの計画に取り組んでいた。戦時体制においても市政の重要課題とされていた。

4. 都市計画における遊覧都市

(1) 町村合併と遊覧都市

1931(昭和6)年4月1日、日野村との合併が実現した。市は「遊覧」を市の発展策と位置付け、県とともに日野村を含めた遊覧区域を都市計画構想に掲げて遊覧施設などの建設展望を描いて日野村の合併を促していた。一方、遊覧施設を整えたい長良村は、市営ホテルの建設地もあり、市景勝地としての長良川周辺もあることは市の遊覧都市構想の背景と共通し、1932(昭和7)年7月1日に合併が可決された。

(2) 都市計画公園・風致地区と遊覧都市

1929(昭和4)年、市は金華山麓の岐阜公園を都市計画公園に指定した際、内申案に既に岐阜公園を一大公園にする展望を描いている。しかし、実施

に至るのは、5年を経て市が風致地区設定を申請した1934(昭和9)年であった。当時の新聞は「岐阜公園建設の前提となつてゐる公園風致地区の指定」⁹⁾がされたと伝え、その関連が把握されていた。この後、岐阜公園の拡大計画が県市一体協調の体制で進められ、田村剛に設計を依頼して具体化した。長良川鵜飼と並んで遊覧都市の発展に貢献しようと位置付けられていたが、財源問題や発起人の宮脇知事の移転により実現していない。

5. おわりに

鵜飼を中心とした遊覧事業を民間から市へ束ね、市が主導した狙いは、以下の項目に整理される。第一に、松尾国松市長がいち早く国際観光への意識を持ったことにより、遊覧都市の中核地として金華山および長良川の景観が際立つエリアに焦点を当て、岐阜市営長良川ホテルなどの遊覧施設を建設することで国際的評価を得ようとしたことがある。全国においても先進的な産業としての遊覧事業を自らの政策の要に据えて分かりやすい大きな目標を掲げたといえる。第二に、都市拡大の時期であり、市としての運営を保つために周辺町村を合併する必要がある、特に長良川沿線の村々を合併する際の前向きな共同事業として同エリアの基盤整備が有効だったことがある。そして第三に、市が同事業を含めた都市計画事業を遊覧事業の基盤整備として推進することが、公園緑地の活用を謳う田村剛を中心とした内務省の動きと同調する岐阜県と協働できる舞台となり、この焦点となった岐阜公園の整備計画は、実施はともかく都市計画円熟期の岐阜にちょうど適合したものと考えられる。

参考文献

- 1) 山口敬太・田中倫希・川崎雅史：近代大津市の「遊覧都市」建設と都市計画，土木学会論文集，Vol.71，No.1，39-54，2015
- 2) 砂本文彦：1930年代国際観光政策の立案過程について，日本観光研究学会機関紙，No.1，Vol.14，2002.9
- 3) 岐阜市：『岐阜市史通史編近代』，1981
- 4) 出村嘉史：岐阜の初期都市計画における土地区画整理事業，日本建築学会計画系論文集，第78巻，第694号，2529-2536，2013.12
- 5) 出村嘉史・岩本一将：明治末期の岐阜市における電気軌道建設と「市区改正」，日本建築学会計画論文集，第80巻，第712号，1319-1327，2015.6
- 6) 前掲：『岐阜市史通史編近代』，p624
- 7) 片野温：『長良川の鵜飼』，岐阜市役所，1953
- 8) 岐阜市歴史博物館：『岐阜市歴史博物館研究紀要』，第19号，p57，2009.3
- 9) 大阪朝日新聞，1934.9.1